

## スウィフトのアイランド貧民 救済案について

三 浦 謙

一般に“A Modest Proposal”と略称されているスウィフトのアイランド貧民救済案は、正式には、“A Modest Proposal For Preventing The Children Of Poor People From Being A Burthen To Their Parents Or Country, And For Making Them Beneficial To The Public.”（貧民の子女が、その両親および国家の重荷とならないようにし、かつ公益に沿うように図るための一私案）という27語からなる標題の論文である。

スウィフトは1720年から1729年の10年間に亘って、アイランド問題を積極的に手がけ、数多くの論文を公けにしているが、この『私案』はその掉尾を飾る論考で、『ガリバー旅行記』出版の3年後の1729年、ダブリンのS. ハーディング社とロンドンのF. ロバーツ社で印刷され、F. ロバーツ社と諸処のパンフレット類の版元が、主にその販売に当った。

この『私案』は標題から察すると、いかにもオーソドックスな改革案のように見受けられるが、1720年以降、精力的に書かれた、いわゆる‘Irish tracts’、とは異なり、諷刺家としてのスウィフトの本領が横溢していて、その点では、極めて斬新な恐るべき提案である。その骨子は生れて一年たった貧乏人の健康な赤子は大変美味で、栄養価の高い食物なので、殺して金持に食べさせてはどうかという案である。調理法はいろいろで、シチューにしても焼いても炙っても茹でてもいいし、フリカシーやラグーにしても結構な味だという。スウィフトは当時のアイランドの人口を1,500,000<sup>(1)</sup>とみて、殺す赤子の数まで綿密に計算している。

The number of souls in this kingdom being usually reckoned one million and a half, of these I calculate there may be about two hundred thousand couple whose wives are breeders, from which number I subtract thirty thousand couples, who are able to maintain their own children, although I apprehend there cannot be so many under the present distresses of the kingdom, but this being granted, there will remain an hundred and seventy thousand breeders. I again subtract fifty thousand for those women who miscarry, or whose children die by accident, or disease within the year. There only remain an hundred and twenty thousand children of poor parents annually born. (p. 208)

(この国の人口は、普通1,500,000と考えられているが、この中、私の計算では、子供が産める夫婦は約200,000である。そこから自分の子供を養育できる夫婦30,000を差引く。もっとも、この国の現在の苦境では、そこまでの数はないかも知れないが。だがこの点は認めてもらうとすると、子供を産める夫婦は残るところ、170,000になる。ここから、さらに、流産したり、事故もしくは病気で、1年以内に死ぬ数を考慮に入れて、50,000を引くと、毎年生まれる貧乏人の子供の数は120,000になる)

ただし、この120,000の子供が、そっくり金持などの食卓に供せられるわけではない。つぎのように仕分けされた上で、料理される。

… that of the hundred and twenty thousand children, already computed, twenty thousand may be reserved for breed, whereof only one fourth part to be males which is more than we allow to sheep, black-cattle, or swine, and my reason is that these children are seldom the fruits of marriage, a circumstance not much regarded by our savages, therefore one male will be sufficient to serve four females. That the remaining hundred thousand may at a year old be offered in sale to the persons of quality, and fortune, through the kingdom, always advising the mother to let them suck plentifully in the last month, so as to render them plump, and fat for a good table. A child will make two dishes at an entertainment for friends, and when the family

dines alone, the fore or hind quarter will make a reasonable dish, and seasoned with a little pepper or salt will be very good boiled on the fourth day, especially in winter. (pp. 209-210)

（すでに計算ずみの120,000の子供の中、20,000は種族保存用にとっておく。この中、 $\frac{1}{4}$ が男子であればよい。この比率は羊や肉牛や豚の割当てを上廻る。そして、これでよしとする私の理由は、これらの子供が野蛮人によってあまり顧みられることのない結婚の産物であることはめったにない点である。したがって、女4人にたいして、男1人で十分なわけだ。残る100,000は1年経ったら、国中の貴族や金持に売りに出す。そのさいいつも、母親には、丸々と肥らせて、りっぱな食卓に出せるようにするために、最後の1ヶ月間は赤子に乳をたっぷり飲ませるようにすすめる。友だちをもてなすさいには、子供1人が2人分の料理になる。家族だけで食事をする時には、前の方ないし後の方の4半分が相応の料理になる。それに、少々の胡椒と塩で味つけして、4日目にゆでると、たいへんうまい。特に冬場ではそうである）

正にグロテスクである。このような着想はまず、日本の文人の感觸からは生れない。終戦後の食糧難の時期に精神薄弱の養女を殺して、その肉を実子と共に食<sup>くら</sup>った母親があったが、円地文子はこの非道に触れて、かかる行為は「私の想像力の範疇にはない」<sup>(2)</sup>と述べている。憎悪が人間を死に追いやる陰湿な殺人は筆にしても、人肉を食う話となると、彼女の想念の粹からはみだしてくる。

ところが、死神に取憑かれたような芥川晩年の力作『河童』に、スウィフト的な発想がみられるのは興味深い。それは河童の国の職工屠殺法に関する条りである。河童の国では平均1ヶ月に、700乃至800の機械が新たに作られて、大量生産が大々的に行われるために、解雇される職工の数が毎月4, 5万匹は下らないというのに、罷業という観念がない。不審に思った河童の国への来訪者が河童の国の屈指の資本家で硝子会社の社長でもあるゲエルと、裁判官のペップと、医者 of チェックにその訳を尋ねる。以下はその問答の抜粋である。

「それはみんな食ってしまうのですよ」

食後の葉巻を啣えたゲエルはいかにも無造作にこう言いました。しかし「食ってしまう」と言うのは何のことだかわかりません。すると鼻目金をかけたチャックは僕の不審を察したと見え、横あいから、説明を加えてくれました。

「その職工はみんな殺してしまって、肉を食料に使うのです。ここにある新聞をご覧ください。今月はちょうど64,769匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下った訳ですよ」

「職工は黙って殺されるのですか？」

「それは騒いでもしかたありません。職工屠殺法があるのですから」

これは山桃の鉢植えを後に、苦い顔をしていたベッツの言葉です。僕はもちろん不快を感じました。しかし主人公のゲエルはもちろん、ベッツやチャックもそんなことは当然と思っているらしいのです。現にチャックは笑いながら、嘲るように僕に話しかけました。

「つまり餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略してやるのですね。ちょっと有毒ガスを嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」

けれどもその肉を食うというのは……

「冗談を言っただけです。あのマッグに聞かせたら、さぞ大笑いに笑うでしょう。あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になっているではありませんか？ 職工の肉を食うことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ」

(pp. 104-105)

マッグというのは河童の哲学者である。河童の国への来訪者はこの話を聞いて、星明りもみえない夜の闇の中を、のべつ幕なしに嘔吐しながら家路につく。

『河童』は僕のライネッケフックスです<sup>(3)</sup>と芥川自身述懐しているように、そこに描かれているのはスウィフトの場合とは異って仮想の世界であり、河童の国の職工屠殺法のごとき殺人法もスウィフトの提案にはみられな

いが引用文中、点線部分はまさしくスウィフト的な発想である。河童の国で河童が河童の肉を食<sup>くら</sup>うことを来訪者が罪惡視すると、河童の国の良識家である医者<sup>の</sup>のチャックは、これを感じ傷主義だとして一蹴してしまう。スウィフトもこの点はあるところがない。そして、スウィフトの提案はチャック流に言えば、「餓死したり自殺したりする手数を国家的に省略する」方法なのである。

だが、ここで更めてスウィフトの提案にみられる非感傷主義を問題にする前に、当時のアイランドの事情をまず心得ておく必要がある。18世紀のアイランドの現実<sup>は</sup>悲惨そのものであった。ダブリンの街路には襤褸を着た子供連れの女乞食が群がり、私生児は日常茶飯事のように殺されていた。失職した労働者は町に溢れ、高い地代を払わされて、バターミルクとジャガイモ<sup>(4)</sup>で飢えを凌ぐ農民はまだしものほうで、多くの農民が飢餓に瀕していた。ニコルソン主教はデリー<sup>(5)</sup>へ向う途上、カンタベリー大主教宛の書簡で、ピカディ<sup>(6)</sup>でもウェストファリア<sup>(7)</sup>でもスコットランドでも、これほど飢えに苦しむ貧民の悲惨な顔は見た例がないと述べているし、ジェリダン<sup>は</sup>『インテリゲンサー』<sup>(8)</sup>で、アイランドの貧民は極貧状態にある。「その家は糞の山で、その食料は家畜の血と畠の雑草である」と述べている。スウィフトは救済案を公けにする1、2年前の1727、8年に書いた『アイランドの現状にかんする私見<sup>(9)</sup>』では、アイランドは元来、地味豊かで気候に恵まれた国なのに、今日のアイランドは大半の地域が荒廃しているので、アイランドを旅する異国の人間はラップランドかアイスランドを旅しているような錯覚にとられるだろうと慨嘆している。ラップランドといえば、今日のノルウェー、スウェーデン、フィンランドの北部およびソ連領コラ半島を含む地域であり、当時<sup>に</sup>あつてはアイスランドと共に、文化果つる僻遠の地である。スウィフトがこのような地域を連想したことからも、18世紀のアイランドがイングランドの苛酷な植民政策の犠牲となつて、いかに窮状<sup>(10)</sup>に喘いでいたかがわかる。

スウィフトの救済案の対象になる赤子たちは、このような状態で、餓死するか、私生児として殺されるか、生きながらえても、乞食としての生涯に

甘んじなければならないかの、いずれかの道しかなかったのである。そして、その乞食も、極貧ゆえに、『リア王』の中でエドガーが描くペドラムの乞食になりかねなかった。彼らは「凄じい呻声をあげ、痺れて無感覚になった裸の腕に、針や、木串や、釘や迷迭香まんねんこうの小枝をみずから突刺して、貧しい百姓家や、その日暮しの小っぽけな部落や、羊小屋や水車小屋に到るまで、つぎつぎと嚇し歩き、時には氣狂いの呪いを浴せかけ、時には神妙な祈りを捧げて、施しを強要する<sup>(41)</sup>」のである。生の現実そのものが地獄であり、そこには、人間の尊厳はかけらほどもなく、道德家の感傷の入る余地は微塵もない。したがって、河童の国のチャックのように、スウィフトも救済案の中で、感傷主義を排撃するのである。だが、そのやりかたは、真向うから感傷を排斥するチャックの方式とは違って、感傷という言葉もつかわずに、全く感傷の入り込む余地のないことを理詰めで説く巧妙な手口である。そのために、スウィフトはまず、盛んに数字を利用する。スウィフトの救済案で対象となる子供は、子供を養育する能力のない両親から生れる子供全部で、その数は前掲の引用文にみられる通り、スウィフトの計算では100,000である。そして、ここで、スウィフトが生後1年の赤子にかぎるのは、1年ぐらいならば、ボロ着代その他一切を含めても、1人2シリングぐらいの費用ですむし、その程度の金高は母親が乞食商売でなんとか稼げるからだ。ところが、スウィフトの計算によると生れたての平均の重さが12ポンドで、普通に育てて、丸1年で28ポンドに肥え太った赤子なら、1人10シリングは固い。とすると母親の懐には8シリングの差益が入って、つぎの子供が生れる迄、なんとか食いつなげることになる。それに生後1年に限る理由はもう一つある。人売り商人の話だと、人身売買の対象になる子供は12才以上だが、12才になっても、せいぜい、3ポンド乃至3ポンド半クラウン止まり。ところが、少くとも、生後1年のときの4倍の費用が食料と衣料にかかるという。つまり、生後1年がどうみても一番好都合なのである。

スウィフトはこのように数字を利用して説得する反面、人間の子供を畜類に降下させるという手段を執拗に用いて、感傷を排斥する。赤子を牛や豚なみに扱うのである。丸1才の健康な赤子は、たいへん栄養のある食物で、

シチューにしても、焼いても、炙っても、茹でてもいいとか、少量の胡椒、塩で味つけをし、殺してから4日目に食べると、ちょうど頃合いだとかいう例は、すでに引用例で示したが、スウィフトは、これではまだ収まらないとみえて、つぎのようにもいっている。

Infants' flesh will be in season throughout the year, but more plentiful in March, and a little before and after, for we are told by a grave author an eminent French physician, that fish being a prolific diet, there are more children born in Roman Catholic countries about nine months after Lent, than at any other season; therefore reckoning a year after Lent, the markets will be more glutted than usual, because the number of Popish infants, is at least three to one in this kingdom. (p. 210)

(幼児の肉は一年中とれるが、3月およびその前後のほうが、たくさんとれる。どうしてかという、著名な医者でもある、フランスのさるモノ書きの話では、魚はたいへん精がつくので、カトリック教国では、4旬節後、略9ヶ月あたりのほうが、ほかのどの時期よりも、子供がよく生れるからである。したがって、4旬節後、1年もすれば、市場には赤子の肉が過剰供給されることになる。この国では少くとも3対1でカトリックの幼児の数が多数を占めるからだ)

これには少々説明がいる。4旬節はカトリックの行事で、イースター・イヴの前の日曜を除く40日間を指す。この間は断食をするが、断食といっても、家畜の肉を禁止されるだけで、魚食は許される。許されるどころか制限が全くない。家畜の肉が絶たれて、精のつく魚が無制限なので、4旬節後、約9ヶ月あたりで、盛んに子供が生れることになる。それが、ちょうど3月乃至その前後に当たる。

また、こんなふうにもいっている。

Those who are more thrifty (as I must confess the times require) may flay the carcass; the skin of which, artificially dressed, will make admirable gloves for ladies, and summer boots for fine gentlemen.

As to our City of Dublin, shambles may be appointed for this purpose, in the most convenient parts of it, and butchers we may be assured will not be wanting, although I recommend buying the children alive, and dressing them hot from the knife, as we do roasting pigs. (pp. 210-211)

(もっと締めり屋は——これも時勢の要望といわなければなるまいが——死体の皮を剥ぐとよい。その皮はうまく加工すれば、婦人用の立派な手袋や紳士用の夏靴ができる。

ところで、ダブリン市だが、市内各所の最も便宜なところに、屠殺所を設ける。それに請合うが、屠殺業者に事欠くことはない。もっとも私としては、子供を生きたまま買ってきて、焼き豚をつくるように、殺したての調理をおすすめするのだが)

ここでは、flay (皮を剥ぐ)、carcass (死体) shambles (屠殺場)、butchers (屠殺業者) といった畜類関係の用語を盛んにつかって、さいごに焼き豚なみの調理をすすめている。

スイフトはこのように、貧民の赤子を徹底して畜類並みに扱う。そして締括りに、この赤子の肉を食用にすることの利益を6つ列挙する。この総括は、すでに述べた功德と2, 3重複もみられるが、その主だった点を要約すると、つぎのようになる。

その1: イングランドにとって最も危険な存在であるカトリック教徒の数が大幅に減る。

その2: 収穫も家畜もすでに差押えられ、金にお目にかかったこともないような貧しい農民に多少うるおいができる。

その3: 100,000の子供を2才以後育ててゆく費用は、1人当たり、年10シリングは下らないが、この『私案』を実行すれば、その費用は省けるので、国民資産は年50,000ポンド増える。

その4: 子供の母親は子供を売って、年8シリングの純益を上げる上に、1年以上子供を育てる費用をまぬがれる。

その5: 赤子の肉を食用にするおかげで、その分、牛肉の消費量が減



るので、約1,000頭分の樽詰牛肉の輸出が増える。

その6：結婚の奨励になる。また、子を孕んでいる牝馬や牝牛や牝豚が可愛がられるように、妊娠中の女房は亭主に可愛がられ、従来のように早産を恐れて、殴ったり、蹴飛ばされたりする<sup>(12)</sup>ことがなくなる。

このようにして、スウィフトは感傷性がいかに現実にはそぐわないかを徹底させるのである。

さて、ここで、以上のようなスウィフトの非感傷主義に関連して、当時のアイランドの現実と併せ、もう一つ考慮すべき点がある。それはイギリス人の体内に泌みついている肉食の思想である。同じ肉食といっても、彼らの場合は日本人のように、切身の肉を口に入れるというような生やさしいものではなく、一般の家庭でさえ、血のしたたる豚の頭がそのまま、食卓に出て、それを顔色一つ変えずに、ナイフとフォークで平げるのである。食べるというよりは、ライオンやハイエナがナイフとフォークをもって食うというほうが当たっている。それでいて、彼らは RSPCA（英国動物愛護会：Royal Society for the Prevention of Cruelty to Animals）のような組織をもうけて、動物を愛護すべきだという。この矛盾をどう受けとめるべきか。彼らが抱いている残酷という観念は日本人の場合とは大幅に違うのだ。彼らには捨犬のように動物を遺棄したり、小鳥などを傷めつけて殺すのは残酷だが、動物をできるだけ苦しめずに殺して、その肉を食用にすることは残酷ではないのである。これは肉食を中心とする人間の合理的な思考である。したがって、殺し方には一切触れずに、もっぱら調理法に専念しているスウィフトの救済案は、日本人よりも欧米人のほうに抵抗が稀薄なように思える。

だが、それにしても、正攻法のアイランド改革案とは打って変ったスウィフトの『私案』が当時のイギリス人およびアイランド人にどのような反響をよびましたか、この点は大いに興味のあるところだが、目下のところ資料不足で、この問題に立入ることはできない。ただ、この『私案』の1, 2年前に書かれた前述の『アイランドの現状にかんする私見』がダブリンおよびロンドンで公けにされたさいの反応が記録に残っている。

この論考は当時アイルランドが蒙っていた不利益を要約したものだが、ダブリンでは、この種の論説は珍しくはなく、官憲の干渉も全くなかった。ところが、ロンドンでは出版業者のミストが迫害を受けたという。匿名で書かれた『私見』にたいして、『私案』は執筆者として、スウィフトの名前も公開<sup>(43)</sup>されている上に、その内容からいっても、遙かに、反響があったのではないかと想像される。この問題については、更めて別の機会に触れたいと思う。

なお、救済案の末尾で、スウィフトは、これを種にして、「一文の金を儲けようにも、それに必要な赤子が私にはない。私の末の子供は9つだし、妻はもう子供が生める年ではない」といっているが、これは救済案がスウィフトの個人的利害とは無縁<sup>(44)</sup>であるというための韜晦である。スウィフトは生涯、妻帯しなかった。したがって、嫡子もいないわけである。

注

(1) 最近の研究では、18世紀のアイルランドの人口は、世紀初頭では、2,500,000, 中期は3,000,000, 世紀末は4,750,000と算定されている。

(K. H. Connell, *The Population of Ireland, 1750-1845*, Oxford, 1950, p. 25)

(2) 円地文子、『旅よせい』三月書房、1975, p. 122

(3) 1927年(昭和2年)2月11日、田端から、佐々木茂索にあてた書簡。

芥川龍之介全集、第18巻、岩波書店、1938, p. 203

ライネッケフックス (Reineke Fuchs) 「ライネッケぎつね」は中世の動物寓話にでてくるキツネの名。

(4) 当時、作付け面積にたいする収穫高が最も多いのがジャガイモであったが、そうかといって安心する余裕はなく、1年でもジャガイモが不作になると、住民の大半が餓死する恐れが多分にあった。

(5) Derry: 北アイルランド北部の州。ロンドンデリーの州都。

(6) Picardy: フランス北部の一地方。

(7) Westphalia: ドイツ北西部の旧州現在、西独ノース・ライン・ウエストフアリア州の一部。

(8) "Intelligencer" (No. VI, 1728)

The poor are sunk to the lowest degrees of misery and poverty—their houses dunghills, their victuals the blood of their cattle, or the herbs of the field.

(9) "A Short View of the State of Ireland"

(10) 極貧の小作農は雨露をなんとか凌げる程度の一部屋しかない泥小屋に、半ば裸同

然で、牛や豚や鶏と同居していたので、正常な年でも熱病が流行しやすく、死亡率は高かった。1740年から1741年の飢饉では死者 400,000 人に上った。18世紀中葉の人口は約 3,000,000 と推定されているので、1割強の人間が飢饉の犠牲になったわけである。江戸時代、人口が最低に達したといわれる天明の飢饉〔天明3年(1783)と天明6年(1786)〕でも餓死もしくは疫疾による死亡者は 200,000 人といわれているので、約その倍に当る厩大な死者の数である。

- (11) Of Bedlam beggars, who, with roaring voices,  
Strike in their numb'd and mortified bare arms  
Pins, wooden pricks, nails, sprigs of rosemary;  
And with this horrible object, from low farms,  
Poor pelting villages, sheep-cotes, and mills,  
Sometime with lunatic bans, sometime with prayers,  
Enforce their charity. (Act II Scene IV)
- (12) ジョージ・オーウェルは1947年に書いた『英国人』(The English People)で1世紀ぐらい前まで、イギリス人の典型的な犯罪は「女房を蹴殺すこと」(Kicking your wife to death)であったといっている。  
(George Orwell, The Collected Essays, Journalism and Letters, vol. 3, Penguin Books, 1970, p.17)
- (13) 執筆者は By Dr. Swift. と明記されている。
- (14) アイランド問題が、スウィフトの個人的利害とは無縁であるということは、“A Short View of the State of Ireland” の中でも触れていて、つぎのように述べている。

But since with regard to the affairs of this kingdom, I have been using all endeavours to subdue my indignation to which indeed I am not provoked by any personal interest, being not the owner of one spot of ground in the whole island, I shall only enumerate by rules generally known, and never contradicted, what are the true causes of any countrys' flourishing and growing rich, and then examine what effects arise from those causes in the Kingdom of Ireland.

### 参 考 文 献

- G. Orwell, The Collected Essays, Journalism and Letters, Volume 3, Penguin Books 1970.
- J. H. Plumb, England in the Eighteenth Century, A Pelican Book, 1965.
- J. Swift, The Prose Works of Swift, Vol. 7 AMS Press, New York, 1971.
- W. Shakespeare, “King Lear”, The Kenkyusha Shakespeare, 1977.
- J. C. ベケット, 『アイランド史』(藤森一明, 高橋裕三訳) 八潮出版社, 1978
- 芥川龍之助, 『河童・歯車・或阿呆の一生』講談社文庫, 1972

鯖田豊之,『肉食の思想』中公新書,1966

荒川秀俊,『飢饉』教育社,1979

円地文子,『旅よそい』三月書房,1975

芥川龍之介,芥川龍之介全集,第18巻,岩波書店,1938